

<研究ノート>

分娩施設と地域の多様な場を連動させた母性看護学実習の効果

Effects of Maternal Health Nursing Training that Combined with Maternity Hospital and Various Facilities in the Communities

徳留静代¹, 菊地美帆¹, 濱松加寸子¹, 井指真由子¹

Shizuyo TOKUDOME, Miho KIKUCHI, Kazuko HAMAMATSU, Mayuko ISASHI

¹ 常葉大学健康科学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Health Science, Tokoha University

【要 旨】

分娩を取り扱う病院施設と、子育て中の親子が地域で利用している助産所、子育て支援センターなど地域の多様な場を連動させた母性看護学実習の効果を明らかにすることを目的とした。対象はB大学健康科学部看護学科3年生88名のうち同意を得られた80名に無記名自記式質問紙調査を行った。実習後の調査では、妊娠・出産・産褥・子育ての実際やそのプロセスを体験でき、地域で暮らす母子の現状に触れたことにより一層退院後の生活を見据えた継続的支援や地域との連携の必要性を学んでいた。分娩施設と地域の多様な場を連動させた母性看護学実習は、病院を完結とした対象理解にとどまらず子育てを行う母子を取り巻く地域も含めた全体像として捉えられた。妊娠・出産・産褥・子育て期にある母子を地域で暮らす生活者として捉えることができ、地域社会も含めた包括支援のあり方を考える機会となったと考える。

Key Words : 母性看護学, 実習効果, 分娩施設, 地域

maternal health nursing, training effect, maternity hospital, community

1. はじめに

平成12(2000)年の介護保険法施行以降、我が国の高齢化の進行に伴い地域包括ケアシステムの構築は年々変化しているが、子育て期にある人々に向けた対策は課題の複雑化から高齢化対策に比べ遅れている現状がある。平成15(2003)年少子化社会対策基本法に加え、地方公共団体や企業等を巻き込んだ次世代育成支援対策推進法の施行によって、子育て期にある人々に向けた対策は少子化対策

から子ども・子育て支援対策に大きく変化した。さらに、高齢者の地域包括ケアシステムを多少なりとも参考にした「子育て世代包括支援センター」を設置することを市町村に努力義務化した改定母子保健法の施行や、子どもを産み育てる時期にある人々に向けた地域包括支援が重要視され、妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない総合的相談支援体制づくりがようやく始まったところである。

看護基礎教育では妊産褥婦とその子ども、将来子どもを産み育てる女性、および過去に

においてその役目を果たした女性のみならず、生涯を通じて性と生殖に関する健康を守るという母性看護の観点から女性と、生殖や育児のパートナーとしての男性、子どもが生まれるあるいは乳幼児を育てる家族、その家族が生活する地域社会も含み学習することが求められている¹⁾。しかし、人的資源確保のための分娩施設の集約化に加え、昨今の看護師養成所の増加に伴い実習施設の確保が困難な状況にある²⁾ことから、女性や家族が生活する地域社会も含めた母性看護学実習になっているとはいえない。看護基礎教育検討会では、少子高齢化が進む中、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステム構築の推進に向け、医療機関に限らず在宅や施設等へ看護実践の場は広がること、看護職は多様な場で多職種と連携して適切な保健・医療・福祉を提供すること、さらに、看護の対象を取り巻く社会の変化やニーズに即した看護職員を養成するために見直しが必要とされている³⁾。

そこで本研究は、分娩を取り扱う病院施設（以下、分娩施設という）実習にとどまらず、子育て中の親子が利用する地域の多様な場で行う母性看護学実習の学びから、分娩施設および地域を連動させた母性看護学実習の効果を明らかにすることを目的とした。地域で暮らす母子および家族を含め地域社会の変化に応じた母性看護学実習のあり方を考える一助となると考える。

2. 研究方法

2.1. 研究対象

中部地方 A 県にある B 大学健康科学部看護学科に在籍する 2018 年度母性看護学実習を履修した 3 年生 88 名とした。

2.1.1. データ収集期間

2018 年 11 月～2019 年 2 月

2.2. 母性看護学実習の概要

本実習は 3 年次看護学臨地実習 2 単位 90 時間、後期に位置づけられた科目であり、母性看護の対象の理解を深め、援助を実施する上での基礎的知識・技術・態度を養うことを目的とした。分娩を取り扱う病院で行う実習（以下、病院実習とする）1 週間、子育て中の親子が地域の中で利用している施設で行う実習（以下、地域実習とする）1 週間、合計 2 週間である（表 1）。

病院実習の主な実習目標は、看護過程の展開技術を用いて褥婦・新生児の支援ができたこととした。褥婦・新生児の受け持ち実習は看護過程の展開、分娩見学などの実習内容とし、1 グループ 4～5 名の学生で病院実習を行った。地域実習の主な目標は、子産み子育てに関する継続支援の重要性について理解を深めるとした。地域実習は助産所（分娩取り扱い有・無）、助産師が経営している母子サービス施設、子育て支援センターで行った。分娩を取り扱う助産所 1 日間、分娩を取り扱わない助産所あるいは助産師が経営している母子へのサービス企業 1 日間、子育て支援センターは半日間とし施設の受け入れ人数に合わせて実習した。分娩を取り扱う助産所では妊婦健康診査のために来所した妊婦に向けた観察技術や、新生児・乳児健康診査などを行った。分娩を取り扱わない助産所では母乳育児支援や子育て相談、家庭訪問事業や産後ケア事業等に参加した。子育て支援センターや母子に向けたサービス企業では、助産師や保育士、その他、母子に関わる人々が企画・運営する講座に参加した。

学内実習は病院実習の受け持ち事例や地域実習施設ごとの学びの共有、実習最終日は母性看護学実習のまとめとして病院実習と地域実習の学びと振り返りを行った。

実習開始前、病院実習・地域実習の実習指導者、実習指導教員は一同に会し実習指導方針の共有を行った。主な内容は、学生の学び

や思いに耳を傾ける姿勢をもち、実習の場で思考の整理ができるよう関わること、臨地実習指導者と実習指導教員が行う学習支援の役割分担などの共有、実習施設間の情報交換等を行った。

2.3. 調査内容

独自に作成した無記名の自記式質問紙調査を用いて調査した。質問紙内の選択式質問は、実習後の母性看護の対象理解、実習前後の関心を問う項目に、「非常に当てはまる」「当てはまる」「当てはまらない」「全く当てはまらない」の4段階の尺度を用いた。母性看護学実習の学びや感じたこと、実習に関する意見や要望などを自由に記述する欄を設けた（以下「自由記載」とする）。

2.3.1. 調査方法

実習最終日に行う母性看護学実習まとめが終了した後、研究者が研究の趣旨・目的・方法・倫理的配慮について口頭と紙面で説明した。回答は自由意志であること、実習評価には関係しないことを強調し、研究者不在の場所に設置しているボックスに投函を依頼した。

2.3.2. 分析方法

質問紙内の自由記載は質的記述的に分析した。得られた自由記載のすべての記述を熟読し、記載内容の文脈の意味や内容を丁寧に読み取りコード化した。次にコード化したものに類似性、共通の意味内容のあるものを集めサブカテゴリー化した。得られたコード、サブカテゴリーの関連性を考慮しながら繰り返し分類の検討を行った。サブカテゴリーのなかで類似性、共通の意味内容をもつものを集めてカテゴリー化した。得られたコード、サブカテゴリー、カテゴリーを繰り返し読み見直し、検討を重ねることでふさわしい言葉になるよう整理した。分析の過程では、複数の研究者による検討を行った。自由記載にある学びの一部を学生の声として紹介した。質問紙調査内の選択式質問項目は、量的データはExcel2013を用いて単純集計を実施した。

2.4. 倫理的配慮

研究対象となる学生には研究の目的、方法、活用方法について説明した。研究参加は自由意志であり同意しない場合でも不利益を生じることはないこと、質問紙調査の内容は成績評価や今後の学生生活に一切影響を及ぼさないこと、研究者不在の場所に設置しているボックスに投函してもらうため個人は特定

表 1. 母性看護学実習スケジュール例

		月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
病院実習 先行 実習計画	学内	受け持ち実習 褥婦・新生児の看護過程					学内 看護過程 発表	助産院 分娩扱い 有	助産院 分娩扱い 無	子育て支援 センター	学内 実習 まとめ
	学内オリ 母性看護 技術の確認 ビデオ学習	分娩見学・集団指導見学等					地域オリ			学内	
地域実習 先行 実習計画	地域実習 まとめ 学内オリ	助産院 分娩扱い有	助産院 分娩扱い無	子育て支援 センター	学内	受け持ち実習 褥婦・新生児の看護過程					学内 看護過程 発表 実習 まとめ
				学内	分娩見学・集団指導見学等						

されないこと、質問紙の提出をもって研究の同意を得られたものとし、研究協力の有無は成績評価に関係しないことについて口頭と書面で説明した。また、質問紙回収後に行うデータ整理の際には、すべて数値化・記号化して表記しプライバシーを確保することを書面および口頭で説明した。本研究はA大学研究倫理委員会の承認（承認番号18-22）を得て実施した。

3. 結果

B大学健康科学部看護学科3年生88名のうち、本研究に同意の得られた80名を対象とした。

3.1. 母性看護学実習の学び

自由記載の内容を母性看護学実習の学んだこと、感じたことなどを整理し表2に示した。実習での学びは【妊娠期から子育て期の母子の経過】【妊娠期から子育て期の母親の思いを実感】【退院後の生活を見据えた継続的支援の実際と連携の必要性】【母子を見る視点の広がり】【病院・地域実習を通して得られた充実感】【実習方法による学びの違い】の категорияが抽出された。《》はサブカテゴリー、「」はコードで記述し母性看護学実習での学びを抽出した。

3.1.1. 【妊娠期から子育て期の母子の経過】

本カテゴリーでは、《妊娠期から子育て期までの母子の一連の経過》《母親の経過と子どもの成長過程》《退院後、地域で子育てしながら生活すること》のサブカテゴリーが抽出された。具体的な内容を例示すると《妊娠期から子育て期までの母子の一連の経過》では、「妊娠・出産・分娩・子育て（地域社会で）一連の流れをとらえられた」の記述や、《母親の経過と子どもの成長過程》では「継続して母と児の成長過程を見ることができた」、《退院後、地域で子育てしながら生活するこ

と》では「病院で受け持った母子の退院後の経過を学べた」などが抽出された。

3.1.2. 【妊娠期から子育て期の母親の思いを実感】

本カテゴリーでは、《妊娠・出産・子育ての大変さ》《退院後の母子の生活の実際》《地域で子育て中の母親が抱く不安》《関わりを通して知った子育て中の母親の思い》のサブカテゴリーが抽出された。具体的な内容を例示すると《妊娠・出産・子育ての大変さ》では「退院するまでが出産ではなく、退院してから子育てが始まることについて身をもって実感できた」、《退院後の母子の生活の実際》では「退院後の母子について知ることができた」、《地域で子育て中の母親が抱く不安》では「出産を終え地域に帰った後のお母さん達がどの様な不安を抱えているかを知れた」、《関わりを通して知った子育て中の母親の思い》では「病院実習だけでは交流できない地域で暮らす母子と交流をもて学びを広げることができた」などが抽出された。

3.1.3. 【退院後の生活を見据えた継続的支援の実際と連携の必要性】

本カテゴリーでは、《継続的支援の実際と必要性》《退院後の母子の生活を見据えた支援を行う重要性》《病院と地域、地域同士の連携》のサブカテゴリーが抽出された。具体的な内容を例示すると《継続的支援の理解と必要性》では「退院後も継続的な支援が必要であることを知れた」、《退院後の母子の生活を見据えた支援を行う重要性》では「病院の支援で何が必要となるのか、地域の実習を通して退院を見据えた支援の重要性を学べた」、《病院と地域、地域同士の連携》では「病院で入院している間にどの様な情報があると良いのかを考えられた」などが抽出された。

3.1.4. 【母子を見る視点の広がり】

本カテゴリーでは、《母性看護の視点》《実習での体験を通して実感した利用者の安心感》《病院と地域の支援の特徴や違い》のサブカテゴリーが抽出された。具体的な内容を例示すると《母性看護の視点》では「病院と地域では同じ母子をみる視点の違い」、《実習での体験を通して実感した利用者の安心感》では「病院では医療者がいる安心感」や「地域ではアットホームな感じで家にいるような安心感」、《病院と地域の支援の特徴や違い》では「病院に必要な支援と地域での子育てを支える支援の共通点や違いを学べた」などが抽出された。

3.1.5. 【病院・地域実習を通して得られた充実感】

本カテゴリーでは、《短い期間の関わりでも多くの学びが得られた喜び》《臨床指導者、教員、学生同士からの働きかけによる気づき》のサブカテゴリーが抽出された。具体的な内容を例示すると《短い期間の関わりでも多くの学びが得られた喜び》では「2週間で学べたのは、ほんの一部かもしれないがとても充実していた」、《臨床指導者、教員、学生同士からの働きかけによる気づき》では

「学生間で話をすることで得られる考え方や、先生、指導者さんから指導を受けることで気づき感じた」などが抽出された。

3.1.6. 【実習方法による学びの違い】

本カテゴリーでは、《実習進度による学びの違い》《短い期間で病院実習を行う難しさ》のサブカテゴリーが抽出された。具体的な内容を例示すると《実習進度による学びの違い》では「病院が先か地域が先に実習かで学び方が変わるかもしれない」《短い期間で病院実習を行う難しさ》では「短い病棟実習では褥婦と関係を築くことが難しい」などが抽出された。

3.2. 実習後の学びと関心

実習後の学びと関心について図1の結果が得られた。病院実習、地域実習を終えて、妊娠・出産から子育てまでの継続的な支援の必要性を理解できたという問いには「非常に当てはまる」78.5%、「当てはまる」21.5%と回答した。医療機関と地域の連携の重要性を理解できたという問いには「非常に当てはまる」67.1%、「当てはまる」30.4%と回答した。また、母性地域実習を行うことにより退院後の子育ての実際が理解できたと回答し

表 2. 分娩施設と地域を連動させた母性看護学実習の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
妊娠期から子育て期の母子の経過	妊娠期から子育て期までの母子の一連の経過 母親の経過と子どもの成長過程 退院後、地域で子育てしながら生活すること
妊娠期から子育て期の母親の思いを実感	妊娠・出産・子育ての大変さ 退院後の母子の生活の実際 地域で子育て中の母親が抱く不安 関わりを通して知った子育て中の母親の思い
退院後の生活を見据えた継続的支援の実際と連携の必要性	継続的支援の実際と必要性 退院後の母子の生活を見据えた支援を行う重要性 病院と地域、地域同士の連携
母子を見る視点の広がり	母性看護の視点 実習での体験を通して実感した利用者の安心感 病院と地域の支援の特徴や違い
病院・地域実習を通して得られた充実感	短い期間の関わりでも多くの学びが得られた喜び 臨床指導者、教員、学生同士からの働きかけによる気づき
実習方法による学びの違い	実習進度による学びの違い 短い期間で病院実習を行う難しさ

た者は「非常に当てはまる」65.8%、「当てはまる」34.2%と、ほとんどの学生が「非常に当てはまる・当てはまる」と回答した。自由記載にある学びの声の一部を紹介する。「妊婦・産婦・褥婦と特徴はあるが、その人自身は変わらない一人の女性であるため、切り離して考えることはできないということを感じた。不安は状況により移り変わるから点ではなく線で見えていくことが大事だ。人との関わり方を学べた実習だった」、「産後の母親たちが地域に帰ってからの悩みや児の成長を学ぶことができた。病院だけではわからない育児の大変さや家に引きこもりがちになってしまう状況を実際に聞き、育児や周りとの関わり、授乳の様子などの不安を引き出し、母親たちにとっても安心できる場だった。地域の助産所や子育て支援センターの役割を学び、母親の声・育児の実際を聞くことができた」などが記されていた。

実習前、母性看護に興味はあったという問いに「非常に当てはまる」36.3%、「当てはまる」40.0%と回答した。実習後、母性看護実習に興味を持つことができたという問いに「非常に当てはまる」70.9%、「当てはまる」25.3%と回答した。実習前・後の母性看護に関する興味について比較すると、実習前「非常に当てはまる・当てはまる」合計

76.3%から、実習後「非常に当てはまる・当てはまる」合計96.2%と興味が高まっていた。母性看護学実習は充実していたとの問いに「非常に当てはまる」86.1%、「当てはまる」13.9%と全員が「非常に当てはまる・当てはまる」と回答した。

4. 考察

本研究は、分娩施設と子育て中の親子が地域の中で利用している多様な場で行う母性看護学実習での学びを明らかにした。研究結果は、【妊娠期から子育て期の母子の経過】【妊娠期から子育て期の母親の思いを実感】【退院後の生活を見据えた継続的支援の実際と連携の必要性】【母子を看る視点の広がり】【病院・地域実習を通して得られた充実感】【実習方法による学びの違い】を学んでいることが明らかになった。

1) 妊娠・出産・産褥・子育ての経過の連続性の理解

【妊娠期から子育て期の母子の経過】【妊娠期から子育て期の母親の思いを実感】の категорияでは妊娠期から子育て期にある対象の理解の学びが得られた。分娩目的のため分娩施設に入院し数日後に退院となる対象から《妊娠期から子育て期までの母子の一連の経過》や《母親の経過と子どもの成長過程》と

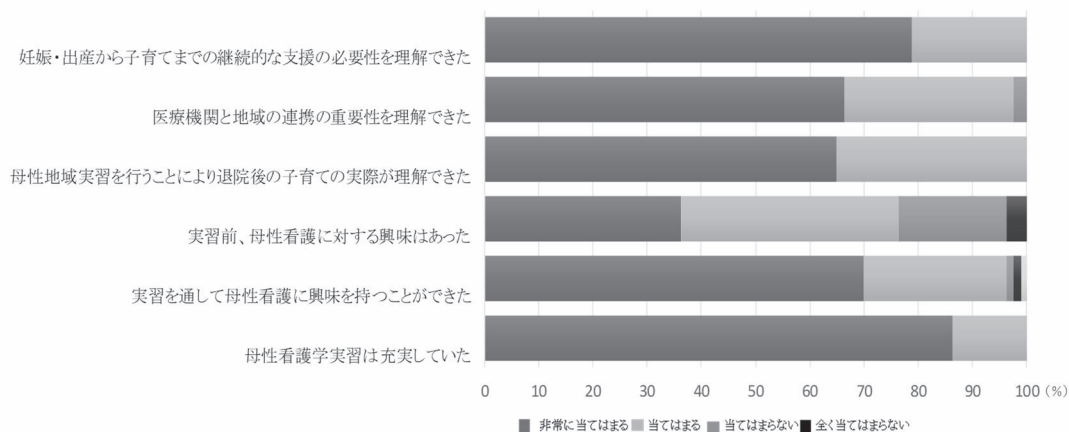


図 1. 実習後の学びと関心

【妊娠期から子育て期の母子の経過】の一通りを捉えられた。地域施設を利用する子育て中の親子との交流は「妊娠・出産・子育ての大変さ」や「退院後の母子の生活の実際」「地域で子育て中の母親が抱く不安」を知ること、【妊娠期から子育て期の母親の思いを実感】する機会となった。【妊娠期から子育て期の母子の経過】のサブカテゴリーである「退院後、地域で子育てしながら生活すること」は、実習のまとめを通して病院実習と地域実習を発展させた学びとなったと考える。近年の人口構造や家族形態の変化などの地域社会の変化により、子どもを産み育てる世代も含めた全世代を対象とした看護が社会より求められている。だが、看護を学ぶ若い世代の人間関係の希薄化や生活体験の不足の現状が指摘され³⁾ 母性看護学を学ぶ学生においても、妊婦や新生児に接した経験がないなど生活経験の不足から対象者の理解や専門知識の修得も難しい現状がある²⁾。分娩施設と母子が生活する地域の複数の施設での実習体験や学びを連動させることで学生の生活経験の不足を補い、子どもを産み育てることは分娩施設だけではなく、地域の生活の場で連続して行われていることを経過として捉えられたと考える。

2) 地域を含めた継続支援の実際と必要性

分娩施設で実施されている子育て期の支援は、入院中の親子の状況を中心とした看護が実践され、退院後に遭遇する問題や変化を予測した長期的な視点に立った支援になっていない⁴⁾と指摘されている。今回の母性看護学実習では、助産所や子育て支援センターなどで出会った親子との交流や、助産師・保育士など地域の支援者と親子との関わり、分娩施設と助産所等の施設同士の連携により、「母性看護の視点」「実習での体験を通して実感した利用者の安心感」「病院と地域の支援の特徴や違い」のサブカテゴリーから【母子を看る視点の広がり】を学んでいた。分娩施設

と子育て中の親子が地域の中で利用している多様な場で行われている支援の実際や支援者と親子との関わりを通して、妊娠期から子育て期にわたる切れ目ない支援体制を整えること、退院後の生活を見据えた連携の重要性を体感していた。サブカテゴリーである「継続的支援の実際と必要性」「退院後の母子の生活を見据えた支援を行う重要性」「病院と地域、地域同士の連携」から【退院後の生活を見据えた継続的支援の実際と連携の必要性】を学んでいた。基礎看護教育では学生の生活体験の少なさや人間関係の希薄さを補い、近年の生活環境の変化に伴った対象の理解により、多様な場で多職種と連携して適切な保健・医療・福祉を提供する人材育成が期待されている⁵⁾。厚生労働省は、子育てを行っている世代が健全な親子・家族関係を築けるようにするために、子育て世代を身近な地域で親身に支える仕組みを整備することが急務である⁶⁾とし、母子保健施策では「健やか親子21（第2次）」基盤課題A切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策の充実と各事業間や関係機関間の連携体制の強化、情報の有効化を図る⁷⁾ことを目標としている。今回の分娩施設と子育て中の親子が地域の中で利用している多様な場を連動させた母性看護学実習は、妊娠・分娩・子育てのプロセスに応じた支援の実際や、地域に暮らす生活者として捉えた支援の必要性、妊娠期から子育て期にわたる切れ目ない支援体制を整えること、子どもを産み育てていく社会の現状や課題を学生自身が実感できた内容であり、看護基礎教育の見直しに求められた教育内容・方法を担っていると考える。短い実習期間の中ではあるが、地域に暮らす生活者として母子の暮らしを知ること、分娩施設と子育てを担う地域施設を包括的に捉えた支援のあり方を学ぶ機会となったと考える。

3) 分娩施設と地域の多様な場を連動させた臨地実習において実習指導のあり方

助産師・保育士など支援者と学生の関わりや、地域で生活する母子との交流を通して「短い期間の関わりでも多くの学びが得られた喜び」「臨床指導者、教員、学生同士からの働きかけによる気づき」のサブカテゴリーから【病院・地域実習を通して得られた充実感】が得られていた。選択式質問調査においても全員が「母性看護学実習は充実していた」と回答していた。大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会によると、臨地実習の体験をそれまでの学修の統合やさらなる学修へと効果的に導いていないなどの課題がある⁸⁾と述べられている。また、臨地実習での学びをより大きなものとするためには、机上の学習と実践をつなぐ学生自らの探求心の向上を支援する必要がある⁹⁾、実習指導者と看護教員が臨地実習の目的や目標について十分な話し合いを持ち、共通認識のもと役割を分担し実習指導に携わる必要がより一層重要である¹⁰⁾と述べている。それぞれの実習施設の実習指導者が一同に会し、学生のレディネスや指導方針の共通理解を行ったことで、カンファレンスや実習のまとめの場面等で、分娩施設や多様な場で体験したことや学びを連動させる学習支援につながったと考える。

一方で、少子化に伴い分娩件数が減少している中、4日間の病院実習で受け持ち対象選択が困難な状況が生じる場合があった。「短い病棟実習では褥婦と関係を築くことが難しい」など人間関係の構築の難しさも見うけられた。一部の学生は「病院実習の間、学内日を1日入れてほしい」など、臨地を離れ学内で思考を整理する時間を望んでいた。また、周産期のサイクルに沿って病院実習後に地域実習を計画しているが、実習施設の競合から実習スケジュールの一部は地域実習が先行するグループもあった。「病院が先か地域が先に実習かで学び方が変わると思う」といった感想も聞かれ【実習方法による学びの違い】に影響することがわかった。臨地実習

中は短時間に自分自身のおかれている環境の変化だけではなく、身体的、精神的、社会的変化に対応しながら看護を展開しなくてはならず、学生は不安と緊張感を抱いた状態¹¹⁾で臨んでいる。学生の自己効力感を高めるためには、看護過程の展開についての自信を持たせることや、実習を行いやすい環境・情動的状态は実習への原動力になる¹²⁾と報告されている。特に病院実習では限られた期間のなかで経過や変化の早い対象を理解し看護過程の展開を求められるため、実習のスケジュールによっては不安や焦りを感じる可能性もある。実習での気づき、学びを整理し翌日の実習につなげられるよう日々のカンファレンスの充実や実習環境のさらなる調整が必要であると考えられる。

5. 本研究の限界

本実習はB大学健康科学部看護学科開設当初から分娩施設と地域の多様な場で母性看護学実習を行っており、実習内容・方法を検討してきた。今回の調査は、2018年度の実習に限定した調査であることから実習効果に限界があった。子どもを産み育てていく社会の現状や支援のあり方を考慮しながら、今後も教育内容・方法の継続的な検討を重ねていくことが重要であると考えられる。

6. 結論

分娩施設と地域を連動させた母性看護学実習は、【妊娠期から子育て期の母子の経過】【妊娠期から子育て期の母親の思いを実感】【退院後の生活を見据えた継続的支援の実際と連携の必要性】【母子を看る視点の広がり】【病院・地域実習を通して得られた充実感】などの効果があった。分娩施設と退院後の支援の場を通し、地域で暮らす母子の現状や社会の中で暮らす生活者として包括的に捉える

機会となったと考える。一方で、短い実習期間で看護過程の思考を整理することが難しく感じる学生も一部いたことから【実習方法による学びの違い】に影響することがわかった。子どもを産み育てていく社会の現状や支援のあり方を考慮しながら、今後も教育内容・方法の継続的な検討を重ねていくことが重要であると考えます。

7. 謝辞

本研究を実施するにあたりご協力くださいました対象者の皆様、支えて下さったすべての皆様に心より感謝申し上げます。

利益相反の開示

本研究における利益相反はない。

なお、本研究は2019年第60回日本母性衛生学会学術集会において、徳留静代が一部の内容を発表した。

引用文献

- 1) 森恵, 高橋眞理, 工藤佳子他: 系統看護学講座専門分野Ⅱ母性看護学概論(母性看護学①), 35-44, 医学書院, 東京, 2016
- 2) 山口雅子, 角眞理: 母性看護学実習における新たな試みと学生の評価. 和歌山県立医科大学保健看護学部紀要, 12: 49-55, 2016
- 3) 厚生労働省: 看護基礎教育検討報告会資料, https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07297.html, 発行 令和元(2019)年10月15日, アクセス 2020年8月26日
- 4) 唐田順子: 病産院における子育てを見据えた産褥期の支援の実態と助産師の役割認識. 母性衛生, 49-2: 357-365, 2008
- 5) 文部科学省: 大学における看護系人材育成のあり方に関する検討会 第二報告 看護学実習ガイドライン, https://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf, 発行 令和2(2020)年3月30日アクセス 2020年8月26日
- 6) 厚生労働省: 子育て世代包括支援センター業務ガイドライン, <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/kosodatesedaigaidorain.pdf>, 発行 平成29(2017)年8月1日, アクセス 2020年8月26日
- 7) 厚生労働省: 「健やか親子21(第2次)」の中間評価等に関する検討会, <https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/000614300.pdf>, 発行 令和元(2019)年8月30日, アクセス 2020年10月26日
- 8) 文部科学省: 大学における看護系人材育成のあり方に関する検討会 第一次報告 大学における看護系人材養成の充実に向けた保健師助産師看護師学校養成所指定規則の適用に関する課題と対応策, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gaiyou/mext_00099.html, 発行 令和元(2019)年12月20日, アクセス 2020年8月26日
- 9) 梅崎みどり, 富岡美佳, 井上理恵: 母性看護学実習における教育方法に関する文献の検討. 山陽論叢, 20: 11-18, 2014
- 10) 馬場好恵, 中島真由美: 看護系大学の臨地実習において実習指導者が実践している看護教員との連携. 聖泉看護学研究, 9: 11-18, 2020
- 11) 神林玲子, 菅野美香, 西脇美晴. 母性看護学実習における学生の不安と自己受容性に関する研究. 山梨医科大学紀要. 17: 80-83, 2000
- 12) 戸田美幸: 母性看護学実習において看護学生の自己効力感に影響を与える要因(文献レビュー). 聖泉看護研究. 7: 41-46, 2018

